
フォーゼマギカ

バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーゼマギカ

【NNコード】

N9840X

【作者名】

バース

【あらすじ】

鹿目まどかが『ワルブルギスの夜』を倒し、全ての魔女を消し去つてから3年後…天の川学園高校一年生になった暁美ほむらのクラスに、あの男が転入してきた。

「俺は如月弦太朗！－この学校の連中全員と友達になる男だ！－！」

彼の発足した『仮面ライダー部』と共に、ゾディアーツ、そして『魔獣』との戦いに身を置くほむら。

そして、彼女の出した結論は…？

これは、如月弦太朗と暁美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

第0話 私の最初で最後の友達（前書き）

第0話 私の最初で最後の友達

「はーい、今日はみんなに転校生を紹介します！」

それが、この日クラス担任の先生が朝一番で発した言葉だった。

転校生……それは一年に一回……いや、学校生活三年間の間に一回あるかないかのビッグイベント。

当然その言葉に誰しもが心躍らせ、いち早くグループに取り入れようとするはず。

ゆつぐりと扉が開かれ……そこから噂の転校生が姿を見せた。

「あ……あの……私……あの……、あ、暁美……ほ、ほむら」と言いました。
よ、よろしくお願いします！」

三つ編みの綺麗な長い髪に、大きなメガネをかけた気弱そうな少女。暁美ほむらと名乗るその少女は少し前まで心臓の病気でずっと入院をしていた。

つい先日その病気が治り、いつでも通っていた病院に行けるよう、そこから最も近いこの学校に転校してきたのだ。

内気そうな彼女は、休み時間になつてもやはり、皆とは溶け込めず、質問攻めにあつても『その……』とか『えつと……』しか言わず。

これでは皆をがっかりさせてしまつ……そう思い、シヨンとした時だつた。

「『じめんね皆、暁美さん…休み時間は保健室でお薬飲まなきゃいけないの。』

「ふえ…？」

突然、ほむらにそう言つて笑いかけてきた少女が一人。
どうやらこのクラスの保健委員らしく、『保健室の場所わかる?』
と聞いてきてくれる。彼女の手を取り、教室の外へと連れ出してくれた。

保健室に行きながら、その子はアハハと笑いほむらに頭を下げる。
「ごめんね暁美さん、みんな転校生なんて珍しいからはしゃいじやつて。」

「ううん…ありがとうございます…」「じやります…。」

「アハハ、いいよ緊張しなくて! クラスマメイトなんだから。あたし鹿田まどか!『まどか』って呼んで! あたしも暁美さんの事、『ほむらちゅやん』って呼んでもいいかな?」

「えつ…?」

驚いた。

今までこんな変な名前…呼んでくれる人なんて家族か病院の先生達ぐらいしかいなかつた…。
いや、そもそも転校生という事を除いてもこんなに親しげに話しかけてくれる人なんていなかつた。

「で、でも変な名前だし…あんまり、名前で呼ばれた事ないし…。」「そんな事ないよ! あたしはかつこいい名前だなあつて思つよ!」「名前負けします……。」「そつかな…? あ、だつたらさー。」

「?」

「ほむらちやんもかつによくなつたりや えば良いんだよーー。」

本当に嬉しかった。

この言葉に、一体どれほど元気つけられたかわからない。
自分はかつによくなれない……最初はそう思つた。

そう、あの時までは……、

『魔女』に襲われるまでは……。

『魔女』……それは、絶望を振りまく災厄の種。
周囲に結界を張り廻らし、獲物を捕らえては殺す。
よく童話に出てくるような老婆の様な姿ではなく、人の形である事
もあればモンスターの形をしている時もあるし、無機物の様な形を
している事もある。
狙われたら最後、死ぬしかない。

こんな形で死ぬなんて……絶望したほむらを救つたのは一筋の光。

「大丈夫ほむらちやん！」

「……鹿田さん……？」

それは、ピンク色の衣装を身に纏い、弓矢を構えるクラスメイトの
姿。

その隣には廊下ですれ違った事がある様な無い様な……とりあえず上級生っぽい少女が立つており、マスケット銃両手に黄色い衣装を纏っている。

何が起きたのか理解ができないほむらの隣に、白い猫の様な生き物が寄ってきて彼女に教える。

「彼女達は『魔法少女』一魔女を狩る者達さー。」

「あ、あなたは……？」

「僕はキュウベえ！ よろしくね暁美ほむるー。」

「こきなり正体がばれちゃったねほむりやん……クラスの皆には内緒だよ?」

それが、鹿田まどかとの『最初の出会い』

以降、ほむらはまどかと、まどかの魔法少女の先輩である田マリヒ共に魔女との戦いを手伝う事になる。

とはいっても彼女自身は魔法少女にはならず、戦いを傍で見ているだけ。

魔法少女とは少女達の祈りをキュウベえこと『インキュベーダー』に叶えてもらい、その代償として魂を『ソウルジェム』と呼ばれる宝石に宿し、魔女を倒すために戦う戦士の総称。

魔女達の落とす『グリーフシード』と呼ばれる宝石を集めることで、魔法少女達はさらに力をつけていく事が出来るのと同時に、消費した魔力を取り除く事が出来るのだ。

この穢れを放つておいたらどうなるのか……それについてはキュウベえは何も言わない。

しかしそれでもまどかもマミも気にしなかった、勿論ほむらも。

彼女達の目的はただ一つ……近いうちにやつてくる最悪最強の魔女『

『ワルブルギスの夜』を倒す事だけだった。
そして、とうとうその日がやってきた…。

「じゃあ、行つてくるね。」

弓を構え、まどかは背を向けほむらじやんと云つた。

彼女の足元には動かなくなってしまったマミの死体…『ワルブルギスの夜』やられ、ソウルジエムを碎かれたのだ。

ソウルジエムを失った魔法少女の末路は『死』のみ、しかしまみもそれは重々承知の上で、この戦いに身を投じていた。

「そんなん巴さん死んじやつたのに…！」

「だからだよ。」

壊滅する街、死した友…普通の人なら絶望するだけ絶望し、生きる気力すら無くす事態をいくつも目の当たりにしながらも…まどかは笑つていた。

それはある意味諦めかもしれない、『ワルブルギスの夜』を倒せるのは自分だけだという覚悟かもしれない、ほむらだけでも守るという決意かもしれない。

まどかは笑いながら振り向くと、『ほむらじやん』と呟いた。

「あたし、あなたと友達になれて嬉しかった。今でも自慢なの、あの時…貴方を救えた事。魔法少女になれて、本当に良かつたって、そう思えるんだ…。」

「嫌……いかないで…！」

「わからぬ、まあひのやさ。」

どうして…死んでしまつとわかつてていたのに…。

この町が『ワルブルギスの夜』に壊されたとしても、誰もまどかを恨んだりしないのに…。

本当は自分の命なんてどうでも良かつた、彼女が生きてくれるのならび。

どうせ消えるはずだつた命、ならばせめて…まどかの力になれて死ぬ……そつ出来たらどんなに良かつただひづ…?

だから、やり直したいと思つた。

「その祈りは本当かい?」

キュウベえが問いかけてくる。

勿論だ、迷いなんかない。

キュウベえと契約すれば魔法少女になれる、どんな祈りもソウルジエムとして輝かせる事が出来る。

ならばほむらの望む願いはただ一つ。

この願いの為になら命を……いや、過去未来全ての時間軸を掛けてもいい。

その願いとは……、

「私、鹿田さんとの出会いをやり直したい……。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守れる私になりたい……！」

こうして、暁美ほむらは魔法少女の力を手に入れた。

その力とは『時間干涉』

この力により、彼女は過去の自分に今の自分を上書きする=過去に遡ることに成功。

今度は魔法少女として、まどかとマミーに接触、協力した。

その強力な力ゆえに、彼女は前線では大活躍……と、言いたいが實際にはやはり守られてばかり。

しかし今度は自分も戦える……一緒に『ワルブルギスの夜』を倒せる。そして……彼女の望み通り、彼女達はどうとう『ワルブルギスの夜』を倒す事に成功した。

成功した……はずだった。

その瞬間、まどかのソウルジェムが突然グリーフシードへと変わり果ててしまったのだ。

これが『穢れ』を取り除かなかつた結末。

最悪の魔女を倒すには、最大の力を使わなければならぬ。
まどかは、その為に再び犠牲になつたのだ。

その答えを知つてしまつたほむらは再び過去へと遡り、今度こそまどかを救おうと尽力。

しかし、その次もダメ。

次も、次も次も次も次も。

全部失敗、どれも最終的な結末は『まどかの魔文化』まどかから生まれた魔女はキュウベえ曰く『ワルプルギスの夜』を遙かに凌駕する存在らしい。

その力は、歴戦の魔法少女達が何人も命を散らしようやく倒した『ワルプルギスの夜』を一撃で葬りさるほど。

悩んだ末、ほむらはいくつ目かの時間で出会つたまどかの言葉を思い出す。

『キュウベえに騙される前の…バカなあたしを助けて…。』

そうだ、簡単な事だつた。

『まどかが魔法少女になる前に『ワルプルギスの夜』を倒せばいい』そうしてほむらは今までの甘い自分を捨て、非常になりきり、まどかを罵倒してまで彼女を守り続けた。

マミが命を落とし、仲間の魔法少女である美樹さやかが魔女に墮ち、それを救う為に佐倉杏子が犠牲となり……それでもほむらは戦い続けた。

単独で『ワルプルギスの夜』に挑み、圧倒的実力の差を思い知られ、彼女のソウルジエムがグリーフシードに墮ちかけたその時……、

「もついいんだよ、ほむらちやん。」

まどかだつた。

この時間の彼女は魔法少女ではなく、普通の中学生の女の子。
しかしそれでも魔法少女の戦いを近くで見続けていた彼女の眼には
覚悟があつた。

ほむらが何度も時間を逆行し、自分を救ってくれていると知つたま
どか。

そのほむらの為に、彼女はキュウベえに願つた。

『全ての宇宙、過去、未来全ての時間の全ての魔女を、生まれる前
に消し去りたい』

「そんな祈りが叶うとしたら、それは奇跡なんてレベルじゃない！
！因果律そのものにたいする反逆だ！！まどか、君は本当に神様に
なろうとしてるのかい！？」

「神様でも何でもいい！！だから、これまで希望を信じてきたみん
なを泣かせたくない、最後まで笑顔でいてほしい…。それを邪魔す
るルールなんて…壊してやる、変えてやる！それが私の願い…！さ
あ、叶えてよ…インキュベーダー…！！！」

その願いは、宇宙そのものを救う願いだつた。

勿論、まどか程強力な素質を持った者ならばそれは可能…しかし、
これを行う事で彼女の人生には『始まり』も『終わり』も無くなっ
てしまつた。

それはつまり、『この宇宙からの追放』
彼女の存在は『存在』よりも上の『概念』というもののに成り果ててしまい、『鹿田まどか』という『概念』を認識できるものはただ一人としていなくなってしまう。

いや、一人だけいる。

暁美ほむらだ。

まどかは消える寸前に、ほむらに言い残した。

『あなたは私の最高の友達』

その言葉と共に自身のリボンをほむらに託すと、まどかの姿は徐々に消えてきた。

彼女曰く、『皆を迎えて行く』そうだ。
これから彼女は魔女に成り果てた全ての魔法少女達を救いにいくのだろう。

『じゃあねほむらちやん、いつか…またもう一度会えるから…。』
『嫌……いかないで…まどか…！』

そうして消えていく鹿田まどか。

『概念』といふ名の『神』になつた彼女は、この宇宙とはまた別の空間へと……その姿を消していった。

それから二年後・天の川学園高校一年B組

ほむらはいつも通り、窓の外から景色を眺めていた。

窓の外では一度三年生が体育の時間でマラソンをやっており、ほむらの仲間である田中アミも同学年である風城美羽と共に並んで走っている。

まどかが全ての魔女の存在を『無かつた』事にした為、本来魔女に殺されたはずのマミもこうして生きている。

ており、この学園に通っているがクラスは別。しかし、そのさやかの姿はどこにもない…。

消えるはずはない。

それを付け狙い、今度は『魔獣』といつものが出現しだした。

さらばにそれに合わせて、最近ではまた別の『闇』の存在が確認され

ている。

少し離れた席に座る歌星賢吾と城島ユウキがそれについて調べている。そ
うだが、ほむらには関係ない。

彼女の標的は『魔獣』……これが今の魔法少女達の駆除対象。
魔女とは違い、魔法少女達が堕落してなる存在ではなく、あくまで
別個の存在。

まどかのおかげなのか、ソウルジエムが黒く染まつても彼女達は魔
女にはならず、そのまま消滅するのみ。

この当たり前の様な風景が、鹿田まどかによつてもたらされたもの
だとは誰も知らない、いや……『知ることができない』
これを知っているのはほむらだけ、マミにも杏子にもわかるはずが
無い、もちろんキュウベえにも。

「はーい、今日はみんなに転校生を紹介しまーす！」

友達はいらない、いれば、その子は魔獣の標的にされる。
だから友達は作らない……ずっとそれでいいと思つてた、そうでな
ければならないと思つていた。

あの男と出会うまでは……、

「俺は如月弦太朗！！俺の夢はこの学園の連中全員と友達になる事
だ！！よろしくな！！」

(…………暑苦しい男、バカみたい……。)

如月弦太朗と暁美ほむら。

仮面ライダーフォーゼと魔法少女。
ソディアーツと魔獣。

そして、スイッチとソウルジエム。

これは、如月弦太朗と暁美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

第0話 私の最初で最後の友達

第0話 私の最初で最後の友達（後書き）

ショートコント・弦太朗のフォーゼマギ力に対する感想

弦太朗「宇宙キター——————！」

ほむら「つるさいー！冒頭から騒がない！！」

賢吾「如月、ようやく本編に出してもらえて嬉しいのはわかるがもう少し落ち着け。」

弦太朗「つしゃあーーこの小説で友達100人作るぜーー！」

ほむら「それ以前にこの小説そんなにキャラでないわよ？」

弦太朗「(OAO)」

賢吾「…………。」

ほむら「さてと…まあ、行きましょう歌星君。」

賢吾「いやいや待て待て、如月どうする？」

ほむら「バカはほっとくに限るわ。」

賢吾（一話（厳密には0話）からこんな扱いでいいのか主人公！？）

第1話 宇宙キタ━━━!

「おーい！ 賢吾ーー！」

「だから名前で呼ぶなと言つてるだろー？」

弦太朗がこの天の川学園高校に転入してきて、早1か月の月日が流れた。

転校初日からとてつもなくカツコいい先輩に苛められ、謎の怪物に襲われ、それを幼馴染の城嶋ユウキと謎の黄色いロボットに乗ったこの歌星賢吾に救われ……そして……、

「宇宙キター——————！」

『フォーゼ』に変身した。

『アストロスイッチ』と呼ばれる『コズミックエナジー』を利用した道具と専用のベルトを使い変身した宇宙の戦士は、この学園に出没するスイッチの怪物『ゾディアーツ』と戦う事に。

後に後輩である野座間友子の言葉がきっかけで弦太朗はこの学園をゾディアーツから守るための部活『仮面ライダー部』を設立し、現在に至る。

今では部員も増え、創設者の弦太朗、部長の風城美羽、部員第1号のユウキに加え、学園のキング『大文字隼』や、情報通の後輩『JK』、それとオカルト系の友子に賢吾と、中々愉快で個性的なメンバーが集まつた。

ちなみに部室はライダー部設立よりもだいぶ前から賢吾が利用している『ラビットハッチ』と呼ばれる場所を利用しており、普段は使

われていかない倉庫のロッカーの中にアストロスイッチを使って生まれた空間を通り、月面に聳え立つこの場所にやつてきている。

それとこの場所の所有者（？）であるはずの賢吾は『仮面ライダー部』を認めていない。

だがいくら否定しても弦太朗が引く訳が無いので、最近ではあまりそういう事を言わない。

彼らは今まさに、その仮面ライダー部の部室に行こうとしているところなのだ。

教室を出ようとすると弦太朗がある事に気付く。

「あれ？」

「どうした如月？」

「なあ、あいつって……？」

「あいつ？……ああ、暁美か。」

弦太朗が指差したのは同じクラスの少女、暁美ほむら。

彼女はいつも一人で本ばかり読んでおり、誰かと口を聞いているところなど見た事が無い。

放課後になつても教室で一人本を読んでいるほむら……『この学園の連中全員と友達になる事』を目指す弦太朗にとつて、それはゆうしき問題だった。

友達の友達は皆友達……それなのにクラスに孤立している存在がいる……と、なればするべき行動はただ一つ。

「賢吾……先に行つてくれ……！」

「は？いや……お前何するつもりだ？」

「決まつてんだろ！！あの暁美つて奴と友達になつてくる……」

「いやいやいや待て待て待て待て！？放課後は新しいスイッチの試験をすると言つただろう！そんなの明日の朝にやれ……」

「いやダメだ！！俺はこの学園の連中全員と一刻も早く友達にならねえといけねえんだよ……」

「何故だ！？」

「俺だからだ！！」

「いや意味わからない！！」

相変わらず弦太朗は時々わけのわからない事を言つ……。

それに今まで付き合ってきたユウキの屈強さが痛いほどわかる、そんな歌星賢吾高校2年生の秋である。

ここで彼と揉めても全く得しないので、仕方なく賢吾は先にラビットハッシュへと向かつて行つた。

賢吾が去つていくと、弦太朗は短すぎる学ランを羽織り直し、微妙なリーゼントを整えながらほむらの下へ。

ほむらが読んでいた本を覗き込みながら、彼は彼女に笑顔で話しかけた。

「何読んでんだ？」

「貴方には関係の無い物よ。」

「……。」「

即答だった。

あまりにも即答すぎて何も言い返せない……弦太朗は実はかなりの口下手だつたりする。

しかしそれでも彼は負けない……『友達マイスター（今命名）』の誇りに掛けて……！

「それ面白いか？」

「ええ、貴方と話しているよりずっと。」

「どういう本なんだ？」

「貴方とは一生無縁の本よ。」

「分厚いな？ 読むの辛くね？」

「私にとつて貴方と話す方が辛いわ。」

「もしかして俺の事嫌い？」

「そうね、どちらかと言えば。」

今までに無い程の攻防戦……これはゾディアーツとの戦闘並みにスリルがある。

それでも弦太朗は負けない……否、負けたくない。

ここで負けては漢がする、以前に大文字や美羽に言われ通り、ただの『トラッシュ』だ。

だからこそ彼は立ち上がり、いつもの様に胸お何度か叩きほむらに手を向けた。

「俺は如月弦太朗！！この学園の連中全員と友達になる男だ！！曉美、お前ともぜってえ友達になつてやるからな！！」

ガタツ！！

弦太朗がそう言つた瞬間、急にほむらが立ち上がつた。

何事かと思い彼女の顔を見る弦太朗……その表情を見て、弦太朗はハツとしてしまつた。

泣いている。

わんわん泣く…というか、涙だけを流しているという感じ。

彼女は弦太朗の胸蔵を掴むと、信じられないほど強い力で彼を教室の外へと放り投げた。

そして壁に叩きつけ、怒りの形相で彼に向かつて咳く。

「一度と…」

「え…え…？」

「一度と私に向かつて……『友達』なんて言葉口にしないで…！！」

それだけ言つと、ほむらは荷物を纏めて逃げるように帰つて行つた。一体自分が何をしたのだろう……弦太朗はこの時、彼女の心の核心に触れてしまつた事に全く気付かず、腑に落ちないまま彼も仮面ライダー部の部室へと向かつて行つた。

学園から500㍍程離れたマンションのある一室

そこは天の川学園高校3年生である、田村の自宅だった。
彼女は4年ほど前に両親を事故で無くし、遠い親戚しかおらず身寄りもない。

だから中学生の時からここで一人暮らしを始め、アルバイトをしながら学校生活をそれなりに満喫している。

1年生の時から仲が良かつた風城美羽は最近、チア部以外の謎の部活に入り鍛になつてゐる為放課後はほとんど会つていない。だから最近では自宅に直帰で、アルバイトがある日以外はここで勉強している。

主に3人で。

「お邪魔するわ。」

「あらほむらさん、いらっしゃい。」

「よう、ほむらー！今日は早いな？」

一緒にいるのは同じ学年で別クラスの佐倉杏子。

一応マミから勉強を教えてもらうという口実で来ているのだが… 来たらだいたい食つか寝るかしかしておらず、教科書なんか開いた試しが無い。

それでも学年末は基本的には10位以内に入るので、勉強は相当地きる方だ。

「杏子、あなた勉強しないんなら帰つたらどうなの？」

「帰るつつもあたしん家、この部屋の隣だもん。」

「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしょうがないわ。」

「マミちゃん、そいつに付き合つてるとそのうち『太り』ますよ？」

「杏子さん、今すぐ帰つてくれるかしら？」

「ほむらてめえ！」

クスクスと笑いながら、自分も鞄を置いてマミと杏子の隣に座るほむら。

ここ3年間、毎日のように繰り返していの日常だ。
はたから見れば彼女らはきっと『友達』に見えるのだ。だが、実際には違う。

彼女達は『同志』なのだ。

同じ秘密を共有し、同じ悩みを持ち、同じ目的の為に生きる『同志』。

だからこそほむらも彼女達と一緒にいられる。

彼女の友達はあくまでも1人だけ……。

『鹿田まどか

それは誰も知らない、暁美ほむらだけの最初で最後の友達。

彼女の事を想うと、今でも胸が痛くなる。

だからこそ、ほむらは友達なんか作らない。

友達なんか作つても……結局最後には悲しい別れが待つているのだから……。

仮面ライダー部

「それは君が悪い。」

「ええ～？ 何でだよ隼～？」

部室に着くなり先ほどほむらとのやり取りの事を他の部員に相談してみた弦太朗。

それを聞くなり我らが大文字先輩が立ち上がり、弦太朗を叱り始めた。

何気に眞面目に怒つてゐる時の大文字は中々圧巻で、弦太朗も肩を小さくせざるを得ない。

「君はレディに対し無粋すぎるんだ。いいか？レディといつのは…例えるならばそう！…まるでソフトクリームの様に柔らかく纖細で、それでいて儂い…。君の『友達になりたい』という気持ちもいが、ここはレディファースト、女性に対するはソフトで…そしてあまく、」

「はいはいわかりましたわかりましたからそろアソタはすつこんでなさい隼。」

「なつ、み、美羽…まだ僕は言いたい事の5%も言いつては…、「アソタ話すと長いんだからいいの。弦太朗にはスイッチの試験があるんだからそんなに長く話なんかしてられないでしょ？」

正論で何も言い返せないキング（笑）

しかしながら大文字の言葉で弦太朗も多少は反省したのか、かなり落ち込んでいる。

そんな彼を元気づけようと後輩のJKと友子がそれぞれエロ本となくやら意味不明な十字架（どこかのEXAのマークっぽい物）を差し出しているが、そこは美羽に止められた。

「でもさ弦ちゃん、あの暁美さんって…結構変な噂立つてるよ?」

「噂？」

そう言つてきたのは幼馴染であるユウキ。

彼女も友達から聞いた話だけど、と少し濁しながら、暁美ほむらという生徒について語り始めた。

「何でもあの子、夜な夜この辺を変なコスプレして出歩いているんだつて！それで白い猫みたなの引き連れて…それでいきなり、『魔獣の気配がする…ツ！』…とか言い出しちゃうんだつて！その後に姿が消えたり、宙に浮かんだり…あーもう…言つてないじつが怖くなつてきちゃつたよー！」

九二

「……………」
「……………」

「アーティスト」――――――――――――

ビビッているユウキに追い打ちをかける（おもに上から）友子。
ただでさえオカルト＆ユウキ好きな彼女…おそらくユウキは当分開放してもらえないだろう。

ユウキにすがつた。

その様子を今まで見ていた賢吾……彼ははあ、とため息をつくと席を立ち、いまだにガタガタ震えている弦太朗の肩をポンッと叩いた。

「あ？……ああ、まあな……。『友達』って言つてた時のあいつの顔

「なんかすこし寂しそうだった……」

「え？」

「行つて來い、如月。」

「行つて来いつてえ？賢吾？」

「君がそんな調子じゃ、スイッチの試験もうまくいくはずが無い。」

今回検証する予定だつたこの『マグネットスイッチ』はまだ何もか

もが不明な謎のスイッチなんだ。そんな危険な物を、精神不安定なう前二度ソニコオ デジライバ 在壊されいや甚うばいからな。

つさと暁美に謝るか何かして、早く戻つて来い。

「なっ！？だ、だから！？俺は君とは親友になつた覚えは無いし、

「そもそもまだ友達になつたとも言つていない!!!!」

! ! !

早速荷物を纏め、部室を出ていく弦太郎。

そう言えは、さっきほむらが教室に読んでいた本を忘れてたなど思
いだし、弦太朗は一度教室へと向かつていた。

27

「…………マハセニ、杏子。」
「ああ、わかつてゐる。」

「『魔獸』の氣配ね。」

廣雅

マミの部屋で勉強をするどころか何故かチーズケーキを食べていた3人は同時に同じ気配に気づくと、全員で部屋を出た。

古来より存在する厄災の種であり、同時に彼女達『魔法少女』が戦

うべき敵

奴らは人に隠れて生き、人々の魂を喰らい続ける。
そうなる前こ到す
それこそが魔去少女の目的だ

そうなる前に倒す……それこそが魔法少女の目的だ。

「あら淫獸、いたの？」

『相変わらず君は口が悪いねほむら。』

巴家の玄関先でスタンバつていた白い猫の様な生物。

それこそが魔法少女の生みの親とも言える存在、『キュウベえ』
真の名を『インキュベーター』ともいい、簡単に言えば『宇宙人』
だ。

魔法少女は全て彼と契約してから生まれる、彼曰く自分がいなければ人類はとっくに滅亡しているか未だに洞穴暮らしで野生の動物を狩つて生きていただろうとの事。

可愛い外見とは裏腹に信用できない胡散臭い奴だが、それでも彼女達とは3年間ずっと一緒に戦い続けてきた仲だ。

キュウベえと共に3人は『魔獸』の気配がする場所……『天の川学園高校2年B組の教室』へと向かつた。

「何だ……こりゃ……？」

教室に入るや否や、弦太朗は信じられないものを目撃した。

何故か机や椅子が宙に浮いており、更に教室の中に階段があつたり、今彼が入ってきたはずの入り口が無くなつてたりしている……。
しかも極めつけがコレ。

『オ……オオオオオ……ツ……！』

『ウオ……ウエエエエイ……ガラミゾ……！』

『ウゴオ……ゴテ……グツデモイイガナ……？』

白いマントに身を包んだ身長5m近い男達。

常識で考えて普通の高校の教室の大きさに収まる様なサイズではなく……しかもところどころから一匹ずつ『生えてきてる』

気持ち悪いにも程がある……どうなってるんだろうこれは……？

「何だこいつら……？スイッチの化けもんでもねえ！？」

『ウゴオ……ザ、ザヨゴオオオオオオオオ……！』

「うわっ！？」

何と、一匹が舌を伸ばし、弦太朗を攻撃してきた。

彼はそれを何とかかわすが、次から次へと怪物たちは襲ってくる。

何がなんだかさっぱりわからない……彼が鞄の中に手を突っ込んだ

その時だった……、

「ティロ・フィナーレ……！」

ドカンッ！！！！

『ウオオオオオオオオン…！！』

『オデノカダダダボドボドダア…！！』

何と、いきなり弦太朗の後ろから巨大な大砲が放たれ、怪物を数匹纏めて消し去った。

彼が思わず振り返ると、そこには3人の変な格好の少女が。

1人はイギリスとフランスの洋服を足して割つたような恰好にベレー帽を被つたマスケット銃の少女。

もう1人は赤い騎士の様な服に長いランスを持つた少女。

そしてもう一人は…、

「あ、暁美…？」

「！？……き、如月君…？」

何と、暁美ほむら。

先ほどまでの制服とは違い、黒い服に小さい丸い盾を装備していた。赤い服の少女がほむらの肩を叩いて聞いてくる。

「何だお前？知り合いか？」

「え……ええ、一応、クラスメイト…。」

「あらそうなの？なら、しっかり守つてあげないといけないわね」

そう言うと2人の少女…マミと杏子は弦太朗の前に立つた。

迫りくる怪物…『魔獣』を薙ぎ払っていく2人。

ほむらも弦太朗に早く逃げるように促しながら、彼女の武器である弓矢を構える。

だが……、

「……女にばつか……守られるわけにもいかねえよな……。」

「何を言つてるの！？早く逃げなさい！……つて、それは……！？」
魔獣からの攻撃を盾で防いでいたほむらが気付いたもの。それは弦太朗の腰のベルト。

大きいバックルに4つのスイッチが嵌め込まれており、彼はほむらの前に立ちながらベルトのスイッチを右から順に一つずつ入れていく。

「き、如月君……貴方なにを……！？」

「何だがよくわかんねえけど……こいつら片づければいいんだな！」

「！」

『3…、』

スイッチを全部入れると、続いてベルトからカウントが始まった。徐々に手を胸の辺りに近づきながら、弦太朗はベルトについているレバーを握る。

『2…、』

「おう 暁美、危ないからちょっと下がってろ…」「何を言つてるの…？危なくて下がるのはあなたの……！？」

『1…、』

「変身ッッ！…！」

その叫びと共に弦太朗は勢いよくレバーを入れ、腕を天に突き上げた。

すると彼の体を白い光が包み込み… どうじにロケットの発射の時のような激しい噴射が辺りに巻き起こる。

それに耐えきれずに吹っ飛ばされるほむら… その後に彼女が見たものは…、

「あ…あれは…！？」

「宇宙…キタ…-----ツ…-----！」

ロケットの様な頭部に宇宙飛行士の様なボディ。

『仮面ライダーフォーゼ』が、魔法少女と魔獣に初めて邂逅した瞬間だった。

第1話 宇宙キタ━━━！――！――！

第1話 宇宙キター————！————！（後書き）

シヨーテコント・巴家の食糧事情

1

マリ「今日の夕飯、何にしようかしら……？」

杏子・あたし鋸食したし！」

2
日
目

マリモをひとと、それじきお夕飯の買ひ物して行けりかしら?

どうだ？ボンゴレパスタ！」

「...ねむこさん、川べ

三

「…マジで、ここにわねえおでん…」

4
四

杏子「カレー食いたいなー。」
マミ「はいはいカレーね。」

5

「今日せ焼き魚にしてよしかじりへ。」

杏子「た・い！た・い！た・い！」

マリ「鯛かあ…ならお刺身の方がいいかも？」

6 田田

杏子「このトーンカツうまー————！」

マリ「ふふふ、よかつたわお口こあつて。」

7 田田

ほむり「杏子、あなた勉強しないんなら帰つたらどうなの？」

杏子「帰るつつてもあたしん家、この部屋の隣だもん。」

マリ「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしようがないわ」

ほむり「マリさん、そいつに付き合つてるとかのうが『太り』ますよ。」

マリ「杏子さん、今すぐ帰つてくれるかじりへ。」

杏子「ほむりひめえーーー。」

第2話 わけがわからないよ

「何……これ……？」

ほむらは一瞬、自分の目の前で起きた事が信じられなかつた。自分は確か、魔獣の気配を感じとり、魔法少女に変身して仲間と共に駆けつけた。

そこで魔獣に襲われていたのはクラスメイトの如月弦太朗で、彼女は彼を守らなくてはならなかつた。

それがどうした事か？

何と弦太朗はほむら達が見た事も無い機械を腰に巻きつけ、なんと『変身』をしたのだ。

ロケットの様な頭部に、宇宙飛行士の様なボディを持つ戦士に…、そり…、

「宇宙…キタ————ツ————！」

『仮面ライダーフォーゼ』に。

「き、如月…君…？」

「つしゃあー！下がつてな暁美、ちょっと危ねえぞー！」

フォーゼはそう言つと、3人の魔法処女を押しのけ、5体の魔獣の前に立つた。

敵目掛けて右手を突き出すと、彼は仮面の下でドヤ顔に成りながら叫ぶ。

「仮面ライダー フォーゼー！ タイマン張りしてもいいぜ……」

「「「はっ！？」」「

その言葉に同時に素つ頗狂な声を上げたほむら、マイ、杏子。タイマン…それは簡単に言うと一対一。だが敵は5体…どう見てもタイマンとは言えない。もしかしてこの男…一人で戦うつもりなのだろうか?

『オ…オ…？ケンジャキ…！？』

『ゾノバズルノビーズハ…オデガノミゴンダアアアア…！…！…！』

相変わらずわけのわからない言葉を叫びながら襲い掛かつてくる魔獸。

長い腕を伸ばし、フォーゼを掴もうとする。

だがフォーゼはフンッと鼻で笑うと、ベルト『フォーゼドライバー』の一一番右端のスイッチを押し、右腕を前へと突き出した。

『ロ・ケ・ツ・ト・オ・ン』

電子音声が鳴るとフォーゼの右腕にオレンジ色の武装が装着される。その名も『ロケットモジユール』…フォーゼ専用のブースターユーツト。

ロケットモジユールの尾から白い煙がまき散らされ、フォーゼは前へ突進、魔獸の攻撃を避けた。

そのまま一旦停止し、魔獸の顎田掛けて再びアタック。

「おりやあああああ…！…！」

『ボドボドッ…！？』

ガコソッ！！と、良い音が鳴り倒れる魔獸。

空中に飛んでいくフォーゼはそこである事に気付いた。

「あれ？…ここ、天井無い？」

いつもならこのまま天井突き破つていくフォーゼだが、今回は何故
かいつまでたつても天井にぶつからない。

この怪物達が作ったと思われる変な空間のせいだろうか？
しかしフォーゼは基本的に馬鹿なので細かい事など考えず、次のモ
ジュールを発動。

『ラ・ン・チ・ヤ・ー／オン レ・ー・ダ・ー／オン』

今度は右脚に『ランチャー・モジュール』が、左腕に『レーダー・モジ
ュール』が出現。

ロケットモジュールをオフにして一旦着地すると、レーダーで魔獸
をセット。

右脚を前に突出し…フォーゼは魔獸目掛けて力一杯ランチャーを放
つた。

『ゴノツ！？』

『ギヨリダラ！…』

『バリアババ・レナ・イナツ！…？？』

「てめえらー！…ちよつとはまともな言葉しゃべれ！…！」

「凄い…。」

フォーゼの戦いに圧巻されるほむら。

彼女だけではない、この場にいるベテラン魔法少女全員がフォーゼ
の戦いに見とれていた。

魔法を一切使わない多彩なモジュール攻撃…喧嘩腰な態度…そして

圧倒的なパワー。

これが仮面ライダーフォーゼ…。

魔獸一體倒すのに、魔法少女がどれほど苦労しているか… フォーゼの戦いはそんな窮屈な戦いを倒すのが目的。

の戦いはそんな常識など覆すほど圧倒的だった。

最後にフォーセは再びロケットモジールを装備し、空中へ舞い上る。

ベルトの右から3番目のスイッチをオンにし、彼は魔獸たちを見据える。

『ド・リ・ルノオン』

左脚に出現する黄色いモジュール・『ドリルモジュール』
それが現れると同時にフォーゼはフォーゼドライバーのレバーに手
を掛け、それを思いつきり入れた。

『ロ・ケ・ツ・トノド・リ・ル』

『ミニマリストブレイク』

「ライダーロケットドリルキ――――ツク!――!――!」

フォーゼのシシ「」と共に、ロケットモジュールとドリルモジュール

ルの合体必殺技である『ライダー・ロケットドリルキック』が発動。ロケット並みにの速度にドリルの回転力が加わった、フォーゼ最強必殺技の一つだ。

一列に並んだ魔獣を、フォーゼは1匹…また1匹と貫き、5匹目まで貫き通すと地面にドリルモジュールを突き立てて急停止。グルグルと回転しようやくフォーゼが止まると……、

バアアアアアアアアアアアアン！――！――！

と、激しい爆発を起こして魔獸は消滅した。

そこから黒いギミックの様な物が数個ホロリと落ちてくる。だんだんと異空間が消えていき、元の教室に戻っていく。

達に駆け寄つた。

「え……ええ、私達は何とも…………。」

「き、如月君……貴方のそれは一体……？」

一ゼに恐る恐る聞いた。

「ホーゼが『えーっと』と説明しようとすると……教室の外から口笛」という足音が。

慌てて魔法処女3人は元の制服姿に変身を解き、フォーゼもドライバーのスイッチをオフにして変身解除。

弦太朗の姿に戻ると同時に教室のドアからひょこっと地学担当の生活指導…大杉が顔を見せ、彼は憎々しげに弦太朗を睨みながら言い放つた。

「おい如月い…？お前こんな時間まで教室で何してんだ！」

「あ、いやあ…これはその…。」

「ん？おお！誰かと思えば3年生の『クイーン』候補、巴マミ君ではありますんかあー！私、実は君の事、いつかはクイーンを狙えると思ってるんですよねえー、頑張ってね！」

「あ、はい…ありがとうございます…。」

何故か大杉は彼女が1学年下の教室にいる事は問わずに、彼女と握手してそのままどこかへ行ってしまった。

ここに話すと人目につく…そう考えたほむらは…、

「仕方ないわね…マミさんの家に行きましょ、近いし、邪魔も入らないわ。」

それに同意し、3人は半ば弦太朗を連行する形で学園から姿を消していった…。

「それじゃ…説明してもらおうかしら？」

「その前にこの縄を解いてもらおうかしら？」

巴家へと連行された弦太朗は、逃げない様にと（ほむらの提案によ

り) マミの魔法でしつかりと椅子に固定されていた。

人間の力じゃまずちぎれないであるうつ魔法の網…何とかかげりつと頑張るが無理っぽい。

何とかほむらに交渉してみるが、どうやら彼女は説明されるまで帰す気は全く無いらしい。

しかし縛っている本人のマミはさすがに可憐そうだと想つたのか：ほむらに少しゆるめるぐらいならいいわよね?と交渉。

3分の議論の末にほむらが折れ、弦太朗は一応、手をまともに動かせるぐらいには繩を緩めてもらえた。

「で、何かしらさつきの……えっと……」

「イカ!」

「そう、そのイカ……って、杏子、アナタちょっと黙つてなさい……。」

「何でだよ…イカっぽいじやん!」

「おう!俺もイカ好きだぜーーー!」

バンッ!!

「…………」

「「もうしわけありませんでした。」

弦太朗と杏子に切れたほむらが学校指定のカバンに何故か入つていた拳銃をぶつ放した。

それにガチガチと震える2人…マミが『〇ーーン』とやつているのは気にしない方向でOK。

「で、なんだつたかしら?」

「あれはフォーゼ!『仮面ライダーフォーゼ』だ!!」

「それそれ…で、何?あのフォーゼって?魔獣達に苦戦もせずに勝つてたけど…?」

ほむらがそう聞くと、弦太朗は『うーん』と唸りだし、ぽりぽりと頭を搔き始めた。

そういうもの無理はない……何せ弦太朗、フォーゼの事を実は何も知らないのだ。

『スイッチ使って怪物と戦うヒーロー』

ぐらいにしか…。

「俺もあんま詳しくねえんだけど……コレ。」
『そごそと鞄を漁り、ゴツイ機械を机の上に取り出す弦太朗。
これが先ほどの変身に使用したベルト『フォーゼドライバー』だ。
そこには4つの形の違うスイッチが嵌め込まれており、彼はそこから良くな使うスイッチの一つ…『ロケットスイッチ』を引き抜くとそれを彼女らに見せた。

「何よコレ？」

「『スイッチ』だ！俺も良くなねえけど、コイツがあると…何といふか…宇宙が来るんだぜ！！！」

「「「はあ…？」」

さつぱり意味不明だつた。

一応彼と同じクラスであるほむらに杏子とマリが『彼つてどういう人？』と聞くと、彼女は『多分…ただのバカ…』と答える。
間違つていない、全くもつてその通りだ。

同じクラスであるほむらの言葉や、先ほどからの言動とこのまますぐな瞳…彼が隠し事をしそうな人間にはどうしても見えない。
多分、フォーゼも良く知らないで使つてるのだろう。
『この『フォーゼ』って何処で手に入れたんだ？』

「借りてるんだ！賢吾からな！」

「賢吾つて…歌星君？確かにあなた達よくつるんでるけど…何？彼もそれに関係あるの？」

「おう！何せ俺達や『仮面ライダー部』だからな！！！」

「 「 「 『仮面ライダー部』 ? 」 」

聞いた事はある。

確かに、都市伝説として語り継がれている『仮面ライダー』の名に肖った部活だ。

前は嫌味全開だったキングこと大文字隼や、プライドの塊の風城美羽、それに他人を平気で利用すると評判の悪かったJKも所属している部活で、何でも入部直後には以前とはまるで別人のように更生するとか何とか…。

マニも同じクラスで結構仲のいい美羽から話をちらりとだけ聞いた事ある。

「この学校を怪物から守る部活だ！！楽しいぜーーー。」

「ああ…そう、良かったわね…。」

もはや聞く気力すら失せる。

ほむらは久々に他人に対し、心の底からため息をついた。
まさか事情を聞き出すだけでここまで疲れるとは……。

「んじゃ、今度は俺が聞くけど…やつらの連中なんだ？『ザワガ』とか言ってた奴ら。」

「ああ…あれは…『魔獣』よ。」

「饅頭？美味そうだな。」

「あなたの頭の中でなら美味しい温泉饅頭が作れそうね。」

「いやあ～、それほどでも無いぜ～」

「…………。」

皮肉を言つてゐるのがわからないのだろうか？

馬鹿なのか純粋なのか…多分前者だろう…。

「奴ら『魔獸』は人間の『憎しみ』という概念から生まれた怪物よ。誰が生んだ…とか明確な正体はわからない。突然異空間を作つて現れて人を襲い、そして忽然と姿を消す……そういう連中よ。」

「アイツらが落としたコレ…なんだ？」

弦太朗がほむらに突き出したのは先ほど魔獸が落とした黒いキューブの様な物。

大きさは消しゴム一個分ぐらいと小さく、パツと見黒糖に見えなくも無い。

ほむらは弦太朗が差し出したそれを受け取ると、自分のソウルジムにかざし…黒いキューブはみるみる内に白く変色して行つた。

「これがこの『グリーフキューブ』の使い方よ。私達『魔法少女』の持つソウルジムにかざす事で穢れを取り除き、魔力を回復する事が出来るの。」

「ま、魔法少女…？ なんだそりや…？」

『それは僕から説明するよ！』

突然弦太朗の後ろから声が聞こえ、彼はどっさに振り返つた。

そこには白い猫の様な生き物が窓の上にぽつりと座つており、魔法少女3人がこの猫の事を『キュウベえ』と呼ぶと、キュウベえはテーブルの上に乗りパタパタと尻尾を振るう。

『魔法少女と言つのは、僕達『インキュベーダー』と契約した少女達の事さ！僕が願いを叶える代わりに彼女達に『魔法少女』という戦士になつてもらい、魔獣達と戦つた時に生じるエネルギーでエンタロピーを増大させて宇宙崩壊を防ぐ為、』

「猫が喋つたら頭良く見えると思ってんじゃねえぞ……！」

『…………ほむら、なんだい彼は？折角僕が僕の事見えるようにしてあげたのに…。』

「大丈夫、彼はただの『馬鹿』よ。」

「わけがわからないよ。」

もはや人の話を一切聞かない弦太朗。

すると彼はいきなり立ち上がり『あつ！－！賢吾達との約束忘れてた
…！』と頭を抱えて唸りだし、そのまま繩を引きちぎって鞄を
手に取ると今度まで向かう。

「ちよつと如月君何処へ行くの！？」

「わりい 暁美… 賢吾達との約束すつかり忘れてたんだ…… そんじゃ
な！」

「あ、ま、待ちなさい！」「

手を振ると、弦太朗は走つて部屋を飛び出し、再び学校へと向かつて行つた。

その途中で彼はある事を思ひ出し、Hレベーターに乗る前に急いで再びマリの部屋に向かつて、ほむらを呼びつけた。

「暁美……」

「な……何よ……？」

「お前にも、こんな良い友達がいたんだな……なんかちょっと安心したぜ！また明日な……！」

「あ、待ちなさい如月君……きや…もう…」

それだけ言つ為にわざわざ引き返してきたのだらうか？

『友達』…その言葉に、ほむらは一瞬心が揺らいだ。

振り返つたそこには、3年前からの『同志』である杏子とマリ…やれとキュウベえ。

もしかしたら彼女達は世間一般的にみると…友達、なのでは無いだろうか…？

そんな事を考えた、ほむらはハツとするとフルフルと頭を振り、そ

んな考えを振り切つた。

(そうよ……私の友達はまだかだけ……友達は……。
）

第2話　わけがわからないよ

第2話 わけがわからなじょ（後書き）

シートコント・キュウベえの日常

キュウベえ『やあー僕はキュウベえ…でもいる普通のインキコーディーを…僕は普段、散歩がてらいい魔法少女候補がないかどうか調査をしているんだ！今日はそんな僕の日常を紹介するよ！』

タマ「にゃー！」

キュウベえ『おや？君は3丁目の梅村さんとこの末っ子タマちゃんじゃないか？びうしたんだい？』

タマ「にゃー…」口にくわえた魚キュウベえに差し出しながらキュウベえ『これは？』

タマ「にゃー…」

キュウベえ『くれるのかい？…』めんね、僕は味覚を感じないから食べても意味が無いんだ。これは君の獲物だから君が食べなよ。』

タマ「にゃー…」

キュウベえ『いつも遊んでくれてるお礼だつて？まるで僕が猫みたいじゃないか…仕方ない、そこまで言つならひりひつよ。』

タマ「にゃー…

キュウベえ『びうこたしました。』

大杉「あー…園田先生は俺の事『好き』…『嫌い』…『好き』…『嫌い』…。」

キュウベえ『あの人はあんなところで花を垂つて何をしてるんだろ

う? わけがわからないう。』

大杉「きら…！？うがああああああああ…！…！…！これも全部如月の
せいだああああああ！…！…！」
キュウベえ『本当にわけわからぬ…』。

十二、ヘボン本兰に付けたる二種

ほむり「あらおかえり。今日は何してたの?」

キユウべえ『君の学校でわけのわからないものを見たよ。それと梅村さん家のタマから魚をもらつた。』

日文書

第3話 友達は作らない（前書き）

今回は短めでクオリティも低めです。

第3話 友達は作らない

仮面ライダーフォーゼとの出会いから半日が過ぎ……朝の7時。ほむらはいつもの様に目覚ましの音で目をさめし、まだまだ眠たい目を擦りながらベットから起き上がった。

頭をポリポリと搔きながら、自分のベットの隣に置いてあるバスケット籠の中を覗く。

そこには白くてモフモフした物体が体を丸めて眠つており、彼女は籠を掴むとそれを盛大にひっくり返した。

どさりという音が鳴り、籠の中から落ちる猫っぽい変な物体。

それはモゾモゾと動くと、ふあ～といつ小さな欠伸をしてほむらと言つた。

「おはよっ、ほむら！」

「起きるの遅いわよキュウべえ……ちつとも怠度するわよ。」「了解だよ。」

もう一度2人して欠伸をすると、まずほむらは洗面所で歯磨き。それから簡単に朝食を済ませると、天ノ川学園高校の制服に着替え、机の上に置いてある自分のソウルジエムを手に取つた。

それを首からぶら下げる、彼女は宝箱の中にしまつてある一本のリボンを取り出す。

「おはよっ……まどか。」

それは彼女の最初で最後の友達だつた鹿田まどかの物だつたリボン。彼女が『円環の理』として消える直前、ほむらに託した『まどかが存在したという唯一の証』

このリボンはほむらにとって自分の命よりも大切な物であり、何が

あらうとも絶対に守らなければならない宝物。

しかしこれを隠しておくような事はせず、黒い髪には田立すさる
色合このそのリボンを巻くと、ほむらはキコウベえを肩に乗せ、学
校へと向かった。

「よう賢吾ーおはよーつさん!」

「如月……お前、結局あの後帰つてこなかつたな……?」

「あ……あー……わりい……ちょーっと変な連中に絡まれてか、そいつ
ら倒してから来たら……もう皆帰つちまつてて……。」

「もう!だつたら連絡ぐらいくれればいいのに!」

「わりいコウキ! 賢吾! 今日帰りにラーメン奢るからーなつ! ?」
いつもの様に登校してきた弦太朗は、昨日の事などまるで忘れたか
のように普段通りの振る舞いを見せ、さも当然の様に賢吾達と話し
始めた。

別のクラスである佐倉杏子は弦太朗が昨日の事を他の連中に喋らな
いかどうか、窓から観察中。

特にまだ言いふらすような感じはしない……。

アンパンをかじりながらジーッと弦太朗を睨みつけてみると……、

「おはよ。」

「どひやああああああああああ! ! ? ? ?」

突然後ろから肩を掴まれ、杏子は「この世のものとは思えない程の絶
叫を上げた。

それにはさすがにクラス全員が気付き、一斉に杏子へと振り返る。

その杏子自身も振り返つてみると、そこにはクラス全員と同じようにビックリ仰天という顔をしたほむらとキュウベえの姿が。

「なんだよお前かよ！？ 齧かすなよ！…」

「齧かすなつて……私は普通に挨拶しただけでしょ？ それよりそこの立つてられると邪魔で教室入れないんだけど？」

『何を見ていたんだい杏子？』

「あ？ いや……あの如月つて奴が周りの連中にあたしらの事喋らねえか……。」

どうやら杏子は弦太朗が魔法少女の事を周りに言いふらして、自分達を笑いものにするんじやないかと疑っていたようだ。

確かにそんな事されたら困るが、特別ほむらは心配していない様子。弦太朗を信頼している……とかじや無く、彼が仮にも魔法少女の事を周りに言いふらしても、『仮面ライダー部』に所属して友達友達言いまくっている『直線馬鹿の厨』的発言など、誰も相手にするはずが無い。

そのライダー部の奴らならわからないが、とにかく、彼のせいでお分達の事がばれる事は無いだろうといつのがほむらの考え。

そう言って杏子を追い払つと、ほむらは自分の席へ。

それに気づいた弦太朗はにやりと笑い、彼女の席まで行くとほむらの席をダンツ！！と叩いた。

「よつ！ おはよう暁美！！」

「…………ええ、おはよう。」

「何だよ元気ねえな？ 友達……佐倉と巴先輩だつたか？ 一緒に来てないのか？ 佐倉つてもしかして別のクラス？」

「あなたには関係無いでしょ？ サッカと城島さん達のところへ戻りなさい。」

「おう！ じゃあな！」

それだけの挨拶をかわして再びユウキ達のところへ行く弦太朗。

彼の姿を見ながら、彼女は昨夜の事を思い出した。

別れ際の彼が言った一言……、

『お前にも、こんな良い友達がいたんだな！－なんかちょっと安心したぜ！』

あの言葉が妙に頭に張り付いて離れない……。

忘れようと何度も頑張ったが、やはり忘れられない……。

『友達』……違う、杏子やマミやキユウベえはそんなのじゃない。

彼女達はただ……目的を同じとするだけの『同志』に過ぎない……。

そんな中、彼女の携帯がブルブルと鳴った。

開いてみると、マミからメールが届いており、内容は『今日の夕飯と一緒にしない？』だった。

たかが同志でこんな言葉を贈るだらうか……？

これは……、

(ねえほむりちゃん！今日のお昼一緒に食べない？)

「違う……。」

まどかのそんな言葉を思い出した。

いつでも自分に優しく接してくれ、勇気づけてくれた大事な大事な最愛で最初で最後の友達。

彼女の言葉には本当にいつも助けられた……だったら、マミ達はどうだろう？

(昨日からなんか調子狂つわ……これも全部アイツのせいよ……。)

(そりか？僕には君が嬉しそうに見えるけど？)

(なっ！？きゅ、キュウベえアンタ勝手に人の頭の中覗くのやめなさいつていつも言つてるでしょ！…だいたいインキュベーダーのアンタが人の感情なんかわかるわけないでしょ！？)

(確かにそうだけども……でも君の頭の中、いつもその『まじか』つて子の事考てる時とおんなじくらいのヒントロジー出てるから。ま、僕に得のある話じや無いから興味は無いけど。)

頭の中でそう言つと、キュウベえはほむらの肩から降りて教室を出て行つた。

普通の人の目には見えないからいいものの（動物には見えるらしい）……あんな宇宙外生命体が校内をうろつき回つていると考へると少し気分が悪い。

キュウベえの姿が見えなくなるとほむらは拳を握り……唇を噛みしめた。

(友達なんて……作らない……！)

昼休み、賢吾やコウキ達は仮面ライダー部の部屋…ラビットハウツチで昼食を摂る事になり、当然弦太朗もそれには参加する予定。しかし、彼には肝心の弁当が無い。
その為に購買へ向かう彼は……、

まさに口ケツの如く……校内を走っていた。

「一日5食限定の『天高特製エビ』、『イカ』…これにあり!」
く為は日夜生徒間での争いが絶えない。

ロケットモジコール着けてんじゃないかってぐらいのスピードで急いで購買がある学食へ行き…財布から小銭を取り出して握りしめる
と、それを購買のおばちゃんの前に叩きつけた。

卷之三

惨敗。

仕様が無く、パンを適当に3つほど買い、弦太朗はトボトボと仮面ライダー部へ向かう。

その途中だった

二〇

.....

「何が最近よく会うよな、お前もメシか?」「見ればわかるでしょ?」

丁度図書室の廊下で、弁護の機をひり下すところであったと申へねた。

「おひこー。」

中を覗くとすでにマリが来ているようだ、キラウベえにアシタマテを食べさせてくる。

「あなた、ソレ、何してるの… 図書室なんて、アナタのイメージ

から180　かけ離れているんだけど？」

「お、俺も本ぐらい読むぜーー!『北の拳』とか『ドラもん』と

カービング

「漫画はかりじゃなー…………ヒジキでお食いそれだけなの?」「ん?あ……ああ…………。」

卷之三

ほむらに言われて、弦太朗はハハハと苦笑して袋を見せた。中にはアンパンと焼きそばパンとソーセージパンが各一個ずつ……どう考へても、成長期真っ只中の男子高校生である弦太朗には少なすぎる。

先ほどまで元気だった弦太朗の表情がだんだんと沈んでいき……最後にはうなだれてしまつた。

「ここんのでよければあげるわ。」

三

やつぱりほむらが差し出したのは、なんと特製エビフライ弁当。

何でも杏子が一回食べてみたいとか言うので、代わりに買って来た
んだそうだ。

幸い彼女が行つた時はまだ誰もおらず、難なくGET。

「い、いいのか？これ佐倉のなんだろ？」

「おの子せどりせ私やアマリれこのまでも食べるからここのは。それだけじや足りないでしょ。」

「あ……曉美……！お前良い奴だな！」

「うるさいなー。」

J.Kも美味しいと絶賛したエビフライ弁当、GET。

少し冷めてしまっているが、問題無く美味しく食べれるだろう。

ほむらの手を取り、弦太朗は彼女に大感謝。

「ありがとう」ありがとう！」

「や、やめなさい！友達でも無いんだから…、」

「だったら今から俺とお前は友達だ！！」

「…………。」

弦太朗がそう言い放つと、ほむらは冷たく彼の手を振りほどき、図書室の扉に手を掛けた。

そして背中越しに、彼に言ひ。

「友達は……作らない……！」

それだけ言い残し、ほむらは図書室の中へ。

『あつ』という声を上げて弦太朗が彼女を追いかけようとするが、彼女の言つた言葉に少し違和感を感じ……追いかけるのをやめて部室へと向かった。

ラビットハッチ

「ういーす。」

「あ、遅いよ弦ちゃん！」

「皆お前を待つて食事に手を付けてないんだ、全く……昼食なんて学校来る前から用意しとけ。」

「わりいわりい。んじゃ、早速食おうぜ！」

仮面ライダー部で彼を出迎えてくれたのは、クラスメイトの賢吾とユウキ…それと先輩である美羽と大文字、後輩のJKと友子だ。全員で弁当を広げては、朝の授業について話したり、普通に高校生らしい話をしたり…。

最近では賢吾も仮面ライダー部の皆とかなり打ち解け、彼は隣に座つているJKと一緒に楽しそうにしゃべっている。

そんな中で…これだけのメンバーを変えるきっかけとなつた男、弦太朗だけは弁当を食べる箸が進まずに会話に参加していなかつた。それに気づいた友子と大文字が弦太朗を心配し、彼に呼びかける。

「どうしたの弦太朗さん……？」

「どこか具合でも悪いのか?ここ数日ゾディアーツが出現していいからな…今までの疲れが出たんじゃないのか?」

「あ、いや…別にどこもわるかねえんだけど…ちょっとと考え事が…。」

「ええ!?弦ちゃん考え方としするの!?

「賢吾君、保健室の医療体制はどんな感じなの?」

「弦太朗さん体大丈夫ですか!?どつかの大きい病院で診てもらつた方がいいんじゃないすか!?」

「おい……さすがに皆、如月に失礼だろ……。」

全員が本気で心配してくれている…喜んでいいか正直微妙などこうだが…。

とりあえず賢吾により全員が反省し、代表して賢吾が弦太朗に聞く事に。

すると弦太朗は『暁美の事なんだけど…』と切りだし、この間の事を話し始めた。

勿論『魔法少女』や『魔獣』の事は話さず、あくまでさわりだけ。

「それでアイツ……さつき俺に言つたんだ。『友達なんか作らない』って……」

「それは暁美が友達が欲しくない……という事じゃ無いのか？お前のその性格は、場合によつては人を大きく癪癪させるからな。まあ、かくいう俺も最初はその一人だったが……。」

「いやなんかな……どつか引つかかるんだよなこの言葉……何だ？」

ほむらの言葉のどこかにバリを感じる弦太朗。

同じ様に、賢吾も彼から聞いたほむらのセリフに違和感を感じていた。

どういう事なのか……それを確かめるのはもう一度彼女に会つて話す必要がある。

彼女が友達を作らない理由……それを知りたい。

「なあ賢吾……俺放課後……、」

「暁美のところだろ？言われなくともだいたいわかつて來たよ……君のその単純な頭はな。」

「言つてくれるぜ！」

2人はお互にフツと笑うと、昼食を食べ終え、全員でそれぞれの教室へと帰つて行つた。

第3話 友達は作らない（後書き）

弦太朗去つた後の魔法少女達

ほむら「お待たせ。」

やつたわ。」

中々甘くて僕の中のHンエロビックか
リミットブレイクしそうだよ。』
『ほむら「そりゃ良かつたわね。」

杏子「おーい！悪い遅れたー！」

「アマノササギ」の皮あれ業。

ほむり「買えなかつたわ。」

「ええー！？ マジかよあたし今この皿メシとかすんだー！？」

あげるわ。」

杏子「わ……お前、（涙）」

ちなみにほむらは弁当代を杏子に返しませんでした、理由? ハハ

だよHIT。

第4話 友達を作らないわけ

放課後になり、賢吾達にラーメンを奢るという約束を先延ばしにしてもらつた弦太朗は今日は部活に行かず、クラスメイト達がほとんどのなくなるのを見計らい…ほむらの下へと行つた。

しかせ……誰がとて立たぬが世間といひ、わざと

「ソソソする理由は、『男らしく堂々と行こうてダメだ』たんだ！！！

だったら今度は男らしく無く、ソソソと行くぜ！！』だそうだ。

黒板を消し終わると彼女は鞄を片づけ、誰もいなくなつた事を確認すると『おいで』と呴き…すると何処からか白い猫の様な生き物キューべえが姿を見せ、ほむらの肩に乗つた。

彼女が席を立ち教室を出でから 強太郎も寝たふりを解説してはむらを追いかけて学校を出る。

今頃仮面ライダー部の艦は何してるんだろうな」と考えながらも彼女の後をこつそりとつけ続け……とりあえず傍から見たら完全に不審者。

待機で

その間往々事あるが、やくの間にほんから出でるが

、震えながらも追跡再開。

彼女の住んでいたアパートまでようやく辿り着くと……弦太朗はほむらが自分の部屋にいくのを……そつと見送つた……。

! !

そこで彼は自分が何のために彼女を追跡しているのか思い出した。

『友達を否定している暁美ほむらと友達になる為』

その目的を完全に忘れてただ彼女が帰宅するのをコソコソと見ているだけなど…もはや完全にストーカーでは無いか。

このまま部屋に飛び込んでいくのもアリだが…その場合間違いないなく銃殺されるだろう。

しかし、何もせずに帰るのも…学校に残っている仮面ライダー部門バーに申し訳がない。

どうしよう…そう悩んでいると、弦太朗の肩がいきなりズシッと重くなり、振り返ってみると彼の肩の上に何故か白い猫が。キュウベえだつた。

『君はこんなところで何をしているんだい?』

「お、お前は昨日の喋る頭の良い猫!!!!」

『キュウベえだよ。』

「私に何か用?」

「あ。」

『学校からずつと気づいていたよ。ほむらはベテランの魔法少女だからね!』

上を見上げると、アパートの『202号室』の窓からほむらが顔を出しておひ、弦太朗はキュウベえに言われるがままに彼女の部屋へ。

とつあえず居間らしき卓袱台のあるところまで案内されると、彼の目の前にそつとお茶が差し出された。

「なんつづーか……意外……だな？」

「マミさんみたいに高級マンションじゃ無くてガツカリした？それとも魔法少女らしくもつとオカルトチックな部屋かと思った？」

「いやあ……もつといひ……宇宙が来る様な部屋かと思つたぜ。」

そんな部屋にしているのは、恐らく日本全国どこを探しても城島ユウキだけだろう。

弦太朗は女の子の部屋など、ユウキ以外では昨日のマミの部屋が初めてだつたので…。

それで？とほむらから切り出し、彼女は目を細めて彼に聞いた。

「私の跡をつけていた理由を聞きましょうか？」

「あ、ああ……いや……お前と友達になりたくてよ。」

「呆れた……如月君、それストーカー。立派な犯罪。訴えたら勝つ自信あるわよ？」

「わ、わりい……。」

さすがに言い返せなくなり、黙り込む弦太朗。

だが、ほむらのセリフが前ほど噛みつく様なセリフでは無いので…これは一応进展ありといつ事でいいのだろうか？

別に彼女は怒っていない……聞くんなら今しかない。

彼女が言つた『友達は作らない』というあの言葉の意味……それを確かめなければ。

「…………なあ暁美…………？」

「何？用が無いんなら早くかえ」「、」

「お前……本当に友達、作らねえのか…？」

「……またその話？何度も言つようだけど、私は友達なんか作る気は無いの。」

「そこなんだよな……引っかかるの。友達が『いらない』んじゃなくて……友達を『作らない』って言つのが……。」

「ツ……！」

弦太朗に言われて立ち上がるほむら。

彼女は弦太朗の腕を掴むと、彼を無理やり引きずり、部屋の外へと追い出した。

おっとうと、と弦太朗がちよつとけなうになると同時にほむらは部屋のドアを勢いよく閉めた。

「お、おい暁美！！」

「帰つて！！もう私にかかわらないで……！」

「いいから……！」

何とかドアを開けようとすると、魔法少女の力を持つほむらの腕力は弦太朗よりも強く、中々ドアを開けられない。

しばらく頑張つてみるが…中から『グスッ…』といつ声が聞こえ、

そこで弦太朗は手を止めた。

今日は失敗しても、ほむらとは同じ学校で同じクラス。

「……仕方ねえ……また明日か……。」

諦めたわけでは無い。

しかし、今日のところはソッとしておいた方が良さそうだ。

そう思い、弦太朗は仮面ライダー部の部室に戻る為に学校への道へと戻った。

『…………泣いているのかい？』

「そんなわけないでしょ。」

『嘘だね。知ってるかい？君、嘘つくと耳がぴくぴく動くんだよ。』

「え、嘘つ！？」

『嘘だよ。』

キュウベえの頭を掴み、壁に叩きつけるほむら。

ベチヨツという嫌な音が鳴り、キュウベえの頭が粉々に砕けた。
それを地面に落とすと……なんどこの間にか新しいキュウベえが
すでにほむらの肩に乗つかっており、彼（？）はフウとため息をつ
いた。

『全く、君も素直じや無いね…………。』

「何がよ……？」

『マミや杏子たちと話しててる時や、あのフォードっていう奴と話て
る時の君、『まどか』って子の事話てる時みたいな感じになるんだ
よ。』『まどか』って子の事話てる時、君……いつも楽しそうだよね？』
「インキュベーター」ときが、人の感情なんかわかるわけないでし
ょ？』

『残念だけど君は人間じや無いし、そんなに浅い付き合いでもない
だろ？まあ……どうでもいいけどね。それより魔獣の気配だ、行く
だろ？』

「当然。マミさんや杏子たちが来てるかわからないけど……早く行
くに越したことは無いわ。』

「またここからかよ……ー？」

その頃、仮面ライダー部へと向かっていた弦太朗は……また例のあの結界に閉じ込められ、身動きが取れなくなっていた。

魔獸の結界…これは本当に突如として出現する為に回避不能。

しかも出る場所はランダムなので何度も巻き込まれる奴は巻き込まれる。

すでに弦太朗の目の前には3体の魔獣が出現しており……彼自身も腰にフォーゼドライバーを巻き付けた。

3

『オウ……コウチヨウノハヤミテズ……!!』

卷之三

「たゞ……本当に何でんのかわからねえなこい」等

2

「ま、前より数少ねえし……今回もチャツチャと斤掛けるぜ!!」

1

「变身ツー！ー！」

カウントが終了すると同時に弦太朗はフォーゼドライバーのレバーを入れた。

彼の全身をゴズミックエナジーが包み込み、如月弦太朗を宇宙の戦士…『仮面ライダーフォーゼ』へと変貌させる。

変身が完了し辺りに煙が噴き出ると、フォーゼは両腕を高くと突き上げた。

「…せつせと倒せてもうつぜ…！」

お決まりの決め台詞を言つと、フォーゼはベルトに嵌め込んだスイツチを一つオンに。

『ロ・ケ・ツ・ト・オ』

右腕に『ロケットモジユール』を装着すると、ロケット噴射で魔獣の一体へと『ライダー・ロケットパンチ』を放つフォーゼ。鋭いパンチが魔獣を突き飛ばすと、続いて『×』に嵌め込んでいるスイッチを取り外して別のスイッチを装着。

同じ様に『』のスイッチも取り替え、ロケットスイッチをオフにして新しいうスイッチ2つを入れた。

『チ・エ・ー・ン・ソ・ー・オ・ン シ・ザ・ー・ス・オ・ン』

「つしゃあ！…こいつで行くぜ！…」

右脚に近接格闘用の『チエーンソー・モジユール』、左腕にも同じようく近接格闘用の『シザースモジユール』を装備。

先ほど1体ぶつ飛ばしたので……残り2体。

ロケットモジユールで急接近してチエーンソー・モジユールでまずは1体を切り裂き、続いて再びロケットモジユールを噴射させて最後の1体に近づく。

シザースモジユールで魔獣を突き上げ、追い打ちで下からのロケットモジユールアッパーを叩き込んだ。

魔獣が地面に落ちると、宙に浮かんでいるフォーゼはフォーゼドライバーのレバーを入れる。

ロケット・チエーンソー・シザースの……3大必殺技の発動だ。

『ロ・ケ・ツ・ト・チ・エ・ー・ン・ソ・ー・シ・ザ・ー・ス・リ

ミシタブレイク』

「ライダーロケット連続十文字切りいいいいいい！」

一田口ケットモジュールで一番近くにいる魔獸に接近。勢いを落とさずにまずはその魔獸をチーンソーで切り裂き、そのまま今度は次の魔獸へ。

それがさはシザースで済れるよとはせり刻むと 最後は一番遠くはいる魔獸をシザースとチエーンソーで、その名の通り『十文字』に切り裂いた。

最後に意味不明な言葉を叫び、爆散する魔獣。

の頭を撫でると、『へへッ』といつ声を上げた。

おかしい。

何故魔獸を倒したのに結界が解除されないのでしょうか？

それなのに、と、フォーゼは頭を傾げた。

消えるのには時間が掛かるのかな?と思いながらフォーゼドライバーの変身解除スイッチに手を掛けた時……、

- > ?

突然、後ろから叫び声が

思わずフォーゼが振り返ったその先には……先ほど倒したはずの魔獣の1体が起き上がり、彼に飛びかかっているという光景が。

バンツ！・！・！

シユウウウウウウウウウウ

「あ、あれ……？」

「甘く見てるのはそつちでしょ？」

あ、暁美！！

何と魔獣の後ろから、更にほむらが魔法少女姿で現れ、
彼女はフオーレゼへ襲い掛かつた魔獣を一発で撃破した。

魔晄は消滅するとその場はクリークを3つ残して完全に消滅。

同時に結界とぼむらの変身が解かれ、それに合わせてフオーヤも変身を解除した。

「ありがとうよ曉美！助かつたぜ！！」

「2度も魔獣に襲われるなんて、あなたよつぽぢついてないのね？」
『それでも魔獣を相手にあそこまで戦えるなんて、やはり仮面ライ

ダ一というのは僕の想像を遥かに超える力を持つている様だ。実際に興味深い存在だね。』

「お、喋る猫！」

『キュウベえだって……もういいよそれで。』

「そうそう、そのキュウベえだったな！何にしてもありがとよー…すがは俺のダチだぜ…！」

「…………ツ…」

弦太朗が言うと、ほむらはそのまま立ち去ろうとする。だが、それを見過ごさない我らが友達マニアの弦太朗……去り立つとするほむらの腕を掴み、彼女を引き留めた。

「おい待てよ暁美！！」

「もういい加減にして！！！」

『ほむら……。』

「いつもいつも友達友達つて……はつきり言って迷惑なのよ…！もしかして、私の事かわいそうだとか思つてるから！？同情なんかでそんな事言わないで…！」

「お前の為？いいや違うね！こいつあ俺自身のためだ…！俺はこの学園の連中全員と友達になる…！勿論お前ともな…！」

「何よそれ…意味わかんない…！私の友達はまどかだけで…あ。」

「まどか？」

しまつた…ほむらは一瞬そう思つた。

弦太朗は確かに馬鹿だが、こういう事はデリカシー無く、ズケズケと聞いてくるに違いない。

その証拠に『誰だまどかって？』とキュウベえに聞きながら、ほむ

らをチラチラと見てくる。

逃げるのも……こんな事の為に魔法少女の力なんか使いたくない。多分逃げてもこいつの方がフォーゼで追いかけてくるだろう。

だから……もう後戻りはできない。

「なあ、まどかって……？」

「私も……、」

「あん？」

「私も……何も最初から友達を作りうとしなかつたわけじゃないわ。私だって、最初は友達が欲しくて欲しくて堪らなかつた……。まどかはそんな私の最初で…そして最後の友達だつた。いいわ如月君、魔法少女の事を知つていてるアナタになら話してもいいかしらね？まつ話したところで信じるかはわからないけれど……？」

それから、ほむらは話し始めた。

自分と『鹿目まどか』との出会い…魔女…『ワルブルギスの夜』…魔法少女になつた理由…そして自身の持つ能力とまどかの最後を。魔法少女であるマミや杏子、それにキュウベえすら…この話はほむらの頭の中にある夢物語としか思つていらない。

自分達の戦つている魔獣が、実は本当は『魔女』と呼ばれる物で、魔法少女達はそれから生まれるグリーフシードを巡つてお互いに漬し合いをしていたなど……今からしてみると信じられない事ばかりだ。

それでも弦太朗は最期まで真剣に聞いた……彼女の『友達を作らない理由』を知る為に。

全てを話し終えるとほむらはふうと溜息をつき、自身の髪をサラッ

と撫でた。

「そんな……そんな事実があつたのか……。
「だから私は友達なんか作らない。私の友達は……まどかだけだも
の。」

「いや、それは関係ねえだろ?」

「なつ！？」

「第一、その『まどか』って奴は本当に、お前が友達を作らない事を
を望んでるのか？そいつ、お前の友達だつたんだろ？」

「そ、そうよ！まどかは私の唯一の友達で……、」

「だったらなおさらだ！！自分の友達が、自分がいなくなつた後に
たつた一人で孤独でいる……そんな事思つ奴が友達なわけがねえ！
！だからソイツがお前が友達を作らない事を望んでるわけがねえ！
！ようやくわかつたぜ……お前が言つている『友達を作らない』って
言葉……その事が何で俺の中でつつかかつてんのがな！！」

「な、なによ……！？」

「お前、本当は友達が欲しいんだろ！？だけど、お前はその唯一の
友達だつた『まどか』って奴がいなくなつちまつた事を引きずつて
る！！そこで、新しく友達が出来ても、『またいなくなる』……そ
う思つてんじやねえか！？だからお前は俺に言つた！！『友達は作
らない』！！友達が『いらない』じゃなくて『作らない』だ！！本
当は友達が欲しくてたまらないのに……いなくなるのが怖くて自分
からそれを避けている！！お前は『まどか』って奴を自分の恐怖心

を隠す為の言い訳に使つてゐるだけだ、そつだろーー？』

『成程ね……僕もようやくすつきりしたよ。君うどこるとほむらは樂しそうなのに、何故か樂しくないっていう理由……さすがは仮面ライダーといった所かな？』

弦太朗の気迫の入った言葉に、ほむらは圧倒されてしまつた。
魔獸にはいくら襲われても圧倒される事は無かつたのに……。
それに彼のこの言葉、信じていない人間がこれ程の気迫を持つてこんな事言えるはずが無い……。

だがそれでも、ほむらは反論してしまつ。

「あ……あんたに私の気持ちがわかるわけない！！私がまどかを言い訳に使つてる……！？冗談も休み休み言いなさい！！大事な親友をそんな事に使うわけ……！」

「じゃあ、直接聞いてみようじやねえか！！その『まどか』って奴になーー！」

「はあー？アンタ、本当に馬鹿じやないの！？まどかは……3年前に……、」

「3年前に、宇宙で消えた……か？だったら……、」

『3……、』

「へ？」

『2……、』

「ちゅ、ちゅうと……？」

『1……』

「変身……！」

フォーゼドライバーのレバーを再び入れ、弦太朗はコズミックエナジーを身に纏い仮面ライダーフォーゼに変身。変身した時点すでにレーダーモジュールを発動させており、それで至急でどこかへと電話を掛ける。
しばりくあると……、

『パワー・デザー』

と、いつ音声と共にどこからか黄色い戦車？みたいな機械と白いバイクが駆けつけ、フォーゼはバイク…マシンマッシグラーの方に跨つた。

「乗れ……！」

「は？え…いや…？」

「いいから早く乗れ……あと、変身はしどけ……！」

何か凄い気迫なので、ほむらは言われるがままに魔法少女へと変身。そしてフォーゼの後ろに跨ると、フォーゼは『タワーモード』へと変形したパワーデザーにマッシュグラーをセット。

何が何だかわけがわからないほむらに対して……フォーゼはマッシュグラーのエンジンを吹かしながら身構える。

四
三
二
一
、

「今から行くぞ……その『おひが』って奴のところへ……。」「え?いやいや無理でしょ!」だつてまどかは宇宙って……ってまさか……!?

『ブラスト・オフ』

そうして……フォーゼとほむらは宇宙へと旅立つた。
フォーゼの装備じゅ月にすら届かないという事を忘れて

第4話 友達を作らないわけ

第4話 友達を作らないわけ（後書き）

・宇宙行きながら

ぼむり「降れしなさい降れしなさい降れしなさい降れしなさい」
ば――――――――――――――――――――

て愉快だよ。』

ほむら「え？」 下見る

「ヤギー……早く降りしなさい……」

！つていうか降ろさないで………！」

『カゲえ』つゝ、高一^{タカイ}。

キユウベえ『なんだか楽しくなつてきたよ。』

キユウベえ『わけがわからないよ（主に君のその僕へ対する扱いについて）。』

結論：ベテラン魔法少女も大気圏突破の恐怖には勝てない。よほむら

第5話 絶対にいなくならない

「もうそろそろ……宇宙キタ -ツ-----！」

「いやあああああ-----降ろして-----降ろしてええええええ-----！」

『ほむらの怯えた顔なんて久々に見たよ。』

天ノ川学園から数キロ離れた場所にて、空高く打ち上がる一筋の光。傍から見たら恐らく、昼間から口ケット花火でもしているだろうと思うだろう。

しかし、実際は違う……これは人だ。

仮面ライダーフォーゼと暁美ほむらだ。

パワー・デザーとマシンマッシングラーは合体すると、フォーゼを宇宙へと打ち上げる事が出来る。

彼はほむらの友達を作らない最大の要因『まどか』に会う為、彼女が消えたという宇宙へとほむらを連れて行こうというのだ。

一応、魔法少女の魂はソウルジエムに封印されている為、肉体がどうなるとも死ぬ事は無い。

それに彼女達の肉体を覆っている衣服は、ソウルジエムから生み出される特殊な物なので、宇宙程度の環境状態ではまず、体に傷一つ付く事は無いだろう。

しかし、肉体が傷つくのと精神的恐怖は全くの別物。

いくら魔法少女だからと言つても、1人の女子高生に過ぎないほむらが宇宙……それもバイクでクラスメイトとインキュベーダーの合計3人で大気圏突破など本来ありえない……というかあってはいけない

い！

それに恐怖を感じない訳が無い。

「ちよ、ちよっとーーー！ 宿舎に行くのはいいけど帰る時ど
すると、ほむらは半ばやけくそになり、フオーヌに尋ねた。

「…もしかしてまた『二ノ』…?」

「心配すんな!! 帰りはラビットハツチから帰してやるからよ!!」

「そりや勿論、月に……つて、あ。」

『どうしたんだいフォーゼ?』

大気圏を突破しながら、突然フォーゼが叫んだ。

「一体何があったのか……恐る恐る尋ねてみる事に。」

そしたら……、

「フォーゼつて……自力じゃ月いけないの忘れてた……。」

『人間は時々、僕らの想像を遥かに超える行動をするね。本当に意

やはりフォーゼは弦太朗だつた。

細かい事なんかすぐに忘れる男、……如月弦太郎。

さすがにパラシュートモジュールで帰るにしても……ほむらがいるのでパラシュートがまともに機能してくれるかわからない。一応、気休めの為に彼は『1番』のスイッチを起動。

『ロ・ケ・シ・ト・オノ』

右腕にロケットモジュールを装備すると、フォーゼはマッシグラーを乗り捨て、ほむらを抱えて宇宙へと飛び出した。

出力を最大まで昇昇させ、何とか戸まで行くべく粘ってみる。
うん、よし……、

共里二〇

『仕方が無いなあ……ここではむらに死なれても困るし、僕が力を貸してあげるよ。』

そう言つと、キュウベえがフォーゼのロケットモジュールに触れた。すると…ロケットモジュールの出力が今までのおよそ10倍近くまで跳ね上がり、先ほどのマシンマッシグラーを超える…まさに『スペースシャトル』並みの速度で月を目指す。

— ! . ! . ! .

「 も、 ま う し ま う く お あ 」

もはや顔が完全に青ざめているほむらは気にせず、月へと一直線に突き進むフォーゼロケット。

やがていつもの見慣れた風景が彼の視界に飛び込んでくると……、

ドオオオオオオオオオオオオオン！――！――！――

ほむらと一緒に勢いよく……用面に激突した。

ほめらは頭を抱えながら、一矢口せばその頭の形が原因で空き殻さ
つてしまつた身体を月から抜こうと頑張りながら何とか立ち上がる
うとする。

立ち上がるや否や、さあはめらが、
せの音材、こを指す
ば半泣き状態で大声で叫んだ。

「殺す気かこの馬鹿！！！アホ！！間抜け！！！」

いてて……まあ、結果的に生きてんだからいいじやん！結果才一

まさか本当に来るなんて

ふつぶつと文句を垂れながら、ほむらも後ろを振り向いた。
そして……その景色を見ながら彼女は『わあ……』という少し可愛らしい声を上げた。

そこに広がっていたのは、幻想的な神秘的な光景。

上空にいくつも流れる流れ星

現象 大きめの星同士がぶつかり合い塵となり、宇宙空間ならではの自然

そして自分達が暮らしている、丸く青い惑星……『地球』

あまりにも美しく、儂い光景に彼女は目を奪われ……フォーゼとキュウ
ウベえはそんなほむらを見てフツと笑いあつた。

彼女がしばらく宇宙に見とれていると、フォーゼは彼女の隣まで歩いてき、そして大声で叫んだ。

「如月君……？」

— 10 —

返事は無い。

当然だ、あるはずがない。

しかしそれでもフォーゼは諦めず、叫び続けた。

最初、彼女はフォー・ゼがこの話を本当は信じていないと思った。
しかし、彼は『まだかに会う』と言つて無茶苦茶なやり方で自分を

そして今、じうじて声が枯れるまでまどかに向かつた呼びかけ続けている。

信じていかない男にそんな事が出来るのか？ただのクラスメイトの為

に、こんな真似が出来るのだろうか？

答えは『出来る』

何故なら、彼が如月弦太朗だからだ。

「無駄よ……まどかは、もう……。」

「お前が諦めてどうすんだ暁美！…『まどか』を覚えてるのはお前だけなんだろ！…そのお前が信じねーと、本当にその『まどか』って奴は死んだことになっちまう！…それでいいのかお前は…？」

「良く無い！…良く無いけど……。」

良くは無い。

だが、どうしても『あの場面』を見てしまった彼女は、『まどか』の名を叫ぶ事が出来ない。

「怖いのか？」

85

「え……？」

「まじかって奴の答えを聞く事が……怖いのか？」

「……。」

「そりゃ そうだよなあ。それを聞いたまつたら、お前はもう逃げる理由が無くなっちまつ。言い訳はもうできねえんだ。違うか？」

「……。」

「お前は怖いんだろ？友達が自分から離れていくのが……。だったら、これからは心配いらねえな！」

「？」

そつぬうと、フォーゼはまむらの手を掴んだ。

すると無理やり『友情の印』を彼女にし、拳を彼女に突き付けた。

「俺がずっと傍にいてやる……」

「なつ……？」

「友達を失う事が怖いんなら、これからは俺がずっとお前の傍にいる……絶対にいなくなっ……俺だけじゃねえ……この喋る猫も一緒にだ……！」

『そろそろ名前で呼んでくれないかな？』

仮面の下で笑うフォーゼと、顔を真っ赤にするほむらと、フォーゼの自分への扱いに若干不満を持つキュウベえ。再びフォーゼが彼女の手を掴むと、彼は用の中心部にある墓地『ラビットハッチ』を指差した。

「行こうぜ！－俺の友達を紹介するぜ－！」

「アナタの友達……それって、『仮面ライダー部』……？」

「おお！皆良い奴らばっかだ！－きっとお前も気に入る！－」

無重力に身を任せ、一気にラビットハッチまで行く2人と一同。1分ほどで到着すると、彼はラビットハッチの扉を開け、いつもの『仮面ライダー部』へと顔を出した。

「おーっすー皆こるかー！」

「げ、弦ちゃん！？え？どうして！？何でいるの！？」

「如月……お前どうやって……って、どうして暁美もいるんだ！？」

？それも生身！？え？ちょ…どうして生きてるんだ暁美！？」

「こまけぇ事気にすんな！」

「いや、無理だろどう見ても！…」

ラビットハッチに到着したフォーゼとほむらを迎えてくれたのは賢吾とユウキという、彼らのクラスメイトだった。

どうやら今日は彼等しかいない様で、部室はガランとしている。多分、美羽と大文字は本来の部活の呼び出し、JKはただの遅刻、友子はその辺で蟻の観察でもしてるのだろう。

ようやく落ち着ける場所に来ると、フォーゼはスイッチをオフにして弦太朗の姿に戻ると、いつも空氣を胸いっぱいに吸い込んだ。それと同時にほむらも魔法少女の変身を解除し、天ノ川学園の制服姿に。

とりあえず彼女を、いつも美羽が座っている席に座らせると、ユウキが恐る恐るお茶を持って来た。

「ど、どうだ……。」

「あ……どうも……。」

「聞かせてもらおうか如月？ 何故彼女がここに……それに、君はどうやってここに来たんだ？」

「おー、俺がここまで来れたのは全部この蝶の猫のお蔭だ！」

「……猫？ そんなのがどこにいるんだ？」

「なんだよ賢吾、お前曰く悪いな。俺の肩の上にいるじゃねえか。確かに、キュウベえは今弦太朗の肩に乗っている。

勿論ほむらにもその姿は見えているが、賢吾と……それとユウキには見えていならしい。

そもそもその筈、キュウベえは本来、魔法少女か魔獣の生み出した空間にいる者、もしくは彼が会話をできなければ困る者にしか姿を見る事は出来ない。

弦太朗の場合は『魔獸空間にいる者』として姿を見えていたが、その後に彼がフォーゼというキュウベえの予想外すぎる存在に変身したため、例外として姿を見せる事を許しているのだ。

なので賢吾とユウキも彼が許可しなければ見る事は出来ない。

「まあ……フォーゼには俺の知らない事がまだあるという事だろう

…。」

「いやだから猫のお蔭だつて。わつかんねえかな？？」

「本題は暁美の方だ。宇宙服もフォーゼも無しに、どうして彼女は宇宙空間で生きていられるんだ？」

「それはアレだ、アイツが『魔法少女』だからだ！」

「…………どうやらフォーゼの多用は使用者の頭をコズミックエナジーで犯す危険性があるようだな……。これは改善の必要が……、」

「いやだからちげえつて！？相変わらずの石頭だなお前……。」

ポリポリと頭を搔く弦太朗を無視し、賢吾はほむらの下へと歩み寄った。

彼は彼女の隣の席……つまりいつも大文字が使用している席に座ると、ほむらに弦太朗にしたのと同じ質問をした。

どうして彼女が宇宙空間でも生身で生きていられたのか…………しかし、彼女からの返答もまた『魔法少女だから』

さすがに頭が痛くなつてきて、賢吾はふうとため息をついた。

「歌星君……私からも一つ聞いてもいいかしら……？」

「？ なんだ？」

「こう言つたら悪いけど……入学したての頃や、つい最近まで……アナタは何と言つか……『近寄りがたい人』だった。それが最近、だんだんと……いい意味で変わつた……。それはどうして？」

「…………なんだ、てつきりフォーゼの事やこの場所について聞かれるかと思つた。簡単な質問だな。」

「あの馬鹿のせいだ。」

「おい！誰が馬鹿だ！ラーラー！」

「弦ちゃん落ち着いて！賢吾君今から良い事言つとこだから！！私達邪魔になるから先帰るね！今日はライダー部お開きつて事でまた明日～！」

「お、おい離せユウキ！あ、曉美また明日なーー！」
ユウキに連行されて姿を消していく弦太朗（あとキユウベえも）。
彼の姿が見えなくなつたところで、ようやく賢吾は心置きなく話せる。

「最初は俺も、仮面ライダー部や友達なんて……バカバカしくて、鬱陶しい……目障りなものだと思っていた。だが、その大きさを教えてくれたのが……不本意ながら、あの馬鹿だつた……というわけだ。」

「大切さ……？」

「ああ。アイツは俺の事を、命がけで救つてくれた。俺だけじゃない。風城先輩もJKも大文字先輩も野座間も……皆アイツに救われた。そしてこの仮面ライダー部に入つた……。」

「…………。」

「だから俺は変われた。アイツは、色んな意味で俺の目標だ。俺はアイツの…………如月弦太朗の友達である事を誇りに思つ。」

「…………彼に言われたの。『俺はいなくなつない。俺がずっと傍にいてやる』って……この言葉、信じてもいいと思うからっ？」

「愚問だな…………当然だ。」

「…………そう。」

お茶を飲み干し、そのままほむらは席を立つてラビットハッチの出入口に立つた。

クルリと振り返り、彼女は少し微笑むと、何も言わずにその場から姿を消す。

賢吾はそれを最後まで見守ると……、

「さてと……それじゃあ、俺もその『友達』の為に頑張るか……。」

『黒いベルトとスイッチ』を手に取り、再び研究室へと戻つて行つた。

弦太朗のせいで、夕飯の準備が遅れてしまつたほむらは、何故か自宅では無く、杏子やマミが暮らしているマンションの方へと足を向けていた。

何故かは知らないが、今日は彼女達と一緒に夕飯を食べたい気分になつた。

キュウベえがいないが、いつも通り夕飯途中に現れるだろ?と思ひながら、マンションの入り口でマミの部屋の番号を押す。しかし何の反応も無い……不思議に思った彼女はマミから預かつている鍵で入り口を開け、エレベーターに乗りマミの部屋へ。ドアノブに手を掛けると鍵がかかつており、留守なのだろうかと今度は隣の杏子の部屋に。

こちらもどうやら留守の様で、自分で仲間外れにされたような気がして少しだけ腹が立つたほむらであった。

「マミさんも杏子も……どうしたのかしら……?」

『ほむらー・魔獸だよーー!』

「キュウベえ? 戻つてたの?」

『あの後あの女の子に連れてかれるフォーゼから逃げ出してきたんだ。それよりもマミと杏子が魔獸と交戦中だ! かなり手こわい……きつと、昨日の奴らの本体だ!!』

「まさか……全然気配がしなかつたのに……!」

『宇宙に行つていたせいだね……僕でも気が付けなかつたよ……。多分だいぶ苦戦してる! 行こうつー!』

「マミさん……杏子! ……」

キュウベえと共に、魔獸の下へと急ぐほむら。何故かはしらないが……魔獸に対して、いつも以上に怒りを感じていた。

第5話 絶対にいなくならない（後書き）

・その頃のライダー部メンバーや

美羽「じゃあ、今日の部活は二二までー皆お疲れ様！」

チノ部 お疲れ様でした！」

大文庫 無題

大文字「ああ、でも、残念ながら」

?

大文字「JKと友子達がユウキから聞いたそうだ。色々と向こうであつたらしいからな。どうだ?久々にデートでも……?」
美羽「私を誘うんなら、まずはその鼻につく作ったようなイケメン面を何とかしてから出直して来なさい」
「超笑顔

JK「ういーす大文字先輩、風城先輩に伝えてくれました?」
友子「私達もこれから帰るところ……先輩も一緒に……。」

J K 「先輩？」

大文字「うえええええん…！美羽…！」

JK「ちょ、ちょっとー？俺男と抱き合つ趣味無いですってー？離れてくださいってー！」

友子「これは……スクープ……！」

JK「見てないで止めて！？ちょ、大文字せんぱーーーーい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840x/>

フォーゼマギカ

2011年12月16日21時52分発行